

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



新盛勝規さんを初めて見かけたのは、彼が17歳の頃だった。

港から集落へと続く一本道ですれ違った彼は、釣竿を片手にさっそうと自転車を立ち漕ぎしていた。登り坂のため、空を仰ぎ見るような体制で少し笑っているような、満ち足りた表情を浮かべていたのが印象的だった。

撮影の待ち合わせは栈橋に朝の6時、冬の八重山は朝6時でもまだ真っ暗だ。明け方4時から海に潜り魚をついて捕っていた勝規さんに「真っ暗な中、懐中電灯だけで潜るの怖くない？」と聞くと「別に怖くない」と静かに答えた。

東の空が薄っすらと赤く染まりだし、朝一番の光で勝規さんを撮影した。

上手く説明できないが、いらぬ物は全部海の中で綺麗に落としてきたような、そんな存在に見えた。

「いくつか持ってく？」と言って捕った魚を分けてくれた。

青、緑、橙、黄色とピンクにヌメッと光るイラブチャーは、パラダイス(楽園)そのものだった。

現在、勝規さんは八重山の船会社に就職し、毎日海と向き合いながら働いている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。